

関西学院大学・地域・まち・環境総合政策研究センター研究報告(3) ～第3回研究発表要旨～

Research Note of Region, Town and Environment Policy Studies Center (3)

関根 孝道・片寄 俊秀・小川 知弘・若狭 健作

Takamichi Sekine, Toshihide Katayose, Tomohiro Ogawa, Kensaku Wakasa

はじめに (関根孝道¹⁾)

2008年5月31日、三田本町商店街の地域交流館「縁」で、関西学院大学地域・まち・環境総合政策研究センター主催の第3回研究発表会が開催された²。前回の開催が2007年の3月だったから、爾来、実に1年有余の歳月が流れたことになる。このようなブランクが生じたのは忙しさにかまけた同センター長である私の怠慢による。なので、お詫びの口上と共に、この序文を書き始めたい。

これまでの研究集会の目的は、同センター研究員の日頃の研究成果を発表し、学際的な観点から総合的に問題の発見・解決を考えるもの—これが総合政策的なアプローチである—であったが、今回はいささか趣を異にしている。奇しくも、昨年は、今や伝説ともなった「本町ラボ」³生誕10周年の記念すべき年であった。この10年の総括を今回の統一テーマとした。

私にも本町ラボの思い出がある。本学部に着任して最初に拝命した委員職が本町ラボ運営委員会であった。当時、なんのことか皆目分から

ず、「大阪市内の本町に実験所があるのか、はてな(?)」と思った。それほど本町ラボのコンセプトは革命的だった。本町ラボの正体は、本稿につづいて詳論されているので、ここでは言及しない。大学、とくに社会科学を標榜する学部は、温室のような象牙の塔に甘んじてはならないと思う。議論の空中戦はやっても意味がない。有害ですらある。本町ラボは、匍匐前進の前線(フロント)であったし、学生にまちづくり・地域振興の地上戦を学ばせる実践場であった。ここで鍛えられた学生を羨ましく思う。商店街という生々しい人生劇場で学べたのだから。

今回の研究発表として3本の論稿を収めた。

第一報告は、本町ラボを提案し、10年余りに亘って運営してきた、もと本学部教員の名物教授でもあった片寄俊秀の「まちなか研究室『ほんまちラボ』で学び、発見したこと」である。ここでは本町ラボの10年が包み隠さず語られている。まちづくり・地域発展の帰納法というべき本町ラボのアプローチは、「言うは易く行うは難し」であり、その極意は貴重な秘伝でもある。この10年間の実践研究には史料的な価値が高いと確信している。

1 関西学院大学地域・まち・環境総合政策研究センター長

2 第1回研究集会の報告要旨は関西学院大学総合政策研究第25号(2007年3月)105頁以下、第2回のそれは同第26号(2007年7月)27頁以下に、それぞれ収録されている。

3 正式名称が「本町ラボ」なのか「ほんまちラボ」なのかそれ以外なのかは定かでない。本稿では、あえて名称を統一することなく、論者の自由な名称表示に任せたが、対象は同一のものである。

第二報告は小川知弘の「まちなか研究室の系譜」である。小川は本町ラボの卒業生で片寄ゼミの1期生であった。本町ラボでの自らの経験を踏まえながら、本町ラボを嚆矢として全国に普及したまちなか研究室の進展が、本町ラボとの比較において紹介されている。片寄の論稿が本町ラボに焦点を絞って深く掘り下げたものだとすると、小川の本町ラボ論は、雨後の竹の子のごとく全国各地に出現したまちなか研究室なるものを広く紹介したものである。両者を読めばまちなか研究室の大体が分かる。小川が博士号を取得し研究者の道を歩み始めたことも喜ばしい。

一方、片寄ゼミの卒業生は本町ラボでなにを学び、そこでの経験をどのように活かしているのだろうか。卒業生からみた本町ラボの評価も重要である。かれらの事後評価なくして本町ラボ10年の客観的な総括もありえない。本町ラボ主宰者の単なる懐古主義では意義がない。第三報告は、卒業生にアンケートを実施し、その内容を紹介し、分析したものである。この報告も本町ラボ出身者である若狭健作の手による。回答は微細で多岐に亘る。その要約は不可能である。この第三報告で要領よく整理されているので、卒業生たちの生の声を聞き、本町ラボ10年の軌跡に思いを馳せてほしい。若狭は、現在、地域シンクタンクで活躍し、今やまちづくり・地域発展の第一人者となっている。とにかく若狭の上梓する地域タウン誌は面白い。躍動感がある。笑いもとる。これも本町ラボでの経験の賜であろう。

いずれの報告も現場主義のスタンスである。その意味について、かつて、「現場主義というのは、『現場に始まり、現場に終わる』という言葉に象徴されるように、研究対象を現場にもとめ、そこでの問題発見・解決を模索し、その成果を帰納的に理論化・体系化し、再び現場に戻して

検証する研究スタイルを指している。現場・現実こそが学びの場であって、われわれの研究の出発点であり帰結点でもある」と解説した⁴。今回の研究報告もこのような研究スタイルに従っている。今後とも、現場主義の総合政策研究を継続していきたい。そのような実践の場であった本町ラボがいつの日か復活することを祈りつつ。

第3回研究集会は三部構成で一般にも公開された。第一部は、明治学院大学の服部准教授の基調講演で始まった。服部は、この日のために明治学院大学から多くの学生を引き連れて駆けつけてくれた。その後、小川の上記まちなか研究室の系譜の発表がつづいた。第二部では、地元商店街の店主や本町ラボに縁(ゆかり)のある人々を交えたパネルディスカッションが延々とつづき、思い出話にも花が咲いた。地元の人たちと学生との交流を通じて、両者一つまり、学生だけでなく店主も！一が人間的に成長していったという。本町ラボは人間ドラマの舞台でもあった。第三部は無礼講の打ち上げであった。狭い会場に最大瞬間風速にして100名以上の現役学生、卒業生、地元の人たちが親睦を深め、会場は人、人、人で溢れた。大盛況であった。学生バンド、オヤジバンド、サックス演奏もあって盛り上がった。「楽しくなければ意味がない」というのも本町ラボの流儀。このようなDNAを受け継ぎたいと思った。

第1 まちなか研究室「ほんまちラボ」 で学び、発見したこと

(片寄俊秀⁵)

はじめに

論者は1996年4月から2006年3月まで関西学院大学総合政策学部の教員として勤務したが、その間1997年6月から2006年3月までの約9年間、まちなか研究室「ほんまちラボ」を兵庫県三田市の商店街の中に設立し、ゼミ室として運営してきた。

論者がこの試みに取り組んだきっかけは、大規模ニュータウンの誕生で当時10年連続で人口増加率日本一を続けていた三田市が、もともとは中世からの陣屋町の歴史をもつと同時に広大な近郊農村に包含されているという、きわめて興味深い構造をもったまちであり、このまちをまるごと研究対象にさせていただけようと考えたことにある。なかでも本施設を設けた歴史的な中心市街地の商店街は、客観的に見るとかなり疲弊しているように見受けられた。同様の中心市街地空洞化の問題は、まさに都市政策上の重要研究課題として多くの研究者が取り組んでいるが、なかなか解決への展望が見えない状況にある。これについて論者は、すべてのカギは現場にあり、地域の方々の知恵のなかにこそ何らかの解決への道が見えるのではないかと考え、長期継続的な現地調査の機会を求めていた。なお、現地に拠点を構えて長期滞在型で研究を展開する手法は、文化人類学ではごく普遍的な手法であり、またいくつかの同様の前例もあって論者自身それらから多くを学んでいる⁶。

1. 論者の「発見」したこと

論者が試みた「商店街の定点観測」の結果として、いくつかの「発見」があったように思う。ただその多くは実証の難しい「仮説」であり、長い経過から説き起こさねばならないので、これまでは著書にまとめて報告してきた⁷。

論者なりに「発見」したと考えている内容を概略整理してみると次の各項である。

(1)「商店街は学びのキャンパス」であるということ

- ①商店街には驚くべき「教育力」があることの発見。商業者たちは、おしなべて頭の回転が速く、しかも的確な人間観察力を有して居られる。その高い教育力に多くのことを教わり、学生たちを逞しく鍛えていただいたと感じている。
- ②商店街とは、まさしく「『知』の高度集積地区」であることの発見。個別の商店は、それぞれが専門分野の代表選手であり、関係業界に関する深い知識と高度な情報収集力を有しておられる。学生の立場からみると、商店街にはいわゆる「卒論ネタ」が山ほどあり、情報収集についての指導者が身近に居られる、ととてもありがたい空間といえる。

(2)「まちづくり学」の重要性について確信をもったこと

阪神淡路大震災において、あるいは近年における世界や日本各地の災害において「まちの仕組みと構造」そのものが多数の人々を殺したという現実を考えたとき、そのあるべき姿を追求する「まちづくり学」の展開は、人類的にみても最も

5 大阪人間科学大学教授、元関西学院大学総合政策学部教授

6 1970年代における東京都三軒茶屋のこどもの遊びとまち研究会の活動、同谷中地区における谷中学校の活動において「まちなか研究室」的な前例があり、また論者らも1970年代に長崎中島川まつりを発案したときに、市内に同様の拠点をつくっていた。

7 拙著「商店街は学びのキャンパス」関西学院大学出版会2002年3月発行。同「まちづくり道場へ、ようこそ」学芸出版社2005年12月発行。

緊要とされる課題の一つと思われる。すなわち研究者としても、人生をかけて、また大学としてはその存立をかけて取り組むべき、価値ある「最先端」の研究テーマの一つと考えるが、いわばそれだけ難しいテーマなのだということでもある。

(3) ほんまちセンター街のもつ「未来都市」性について

難しいことの一つとして、「まちづくりの目標像が見えない」ことがあるのではないか。かつて1960年代から70年代の前半にかけて「未来都市論」が盛んに論議された時代があるが、当時の論調の多くが、エネルギー多用、ハイテック、クルマ社会の到来にきわめて楽観的な視点に立っていた。しかし、その方向は地球規模での破局への道であることがすでに明らかになっているにも拘わらず、真に希求すべき未来都市像が見えていない。これに関連して、論者は「ほんまちラボ」において「定点観測」してきた結果、外見こそ商店街としては衰退著しいこの「住・商混在地区」こそが、じつは人々が真に求めている「ほんまもの未来都市」ではないかと考えるに至った。すなわち、

- ① みんなが顔見知りのまち → 抜群の防犯性がある
- ② 世代間交流、人々の対話があるまち → 未来へ展望がある
- ③ 子どもと高齢者にやさしいまち → 福祉性がある
- ④ とときどき「まつり」などがあって、住んで楽しいまち → 愉楽性がある
- ⑤ 伝統的な美しい町並みと環境維持に住民が努力しているまち → 持続性がある
- ⑥ 商・農・学の連携がはじまったまち → 連携性がある。

2. コラボレーションの難しさと望ましいあり方を求めて

(1) 問題の発生と深刻化のおそれ

スタートは蜜月のようというのは、われわれ自身が「ほんまちラボ」でも味わった経験である。だが、期待と現実の「ズレ」は次第に顕在化していく。地域や商店街の側も、大学の側も過大な期待をしては、しばしば裏切られる。そこには大学研究者の力量的限界があること。実学的蓄積の貧困。専門的研究者の不足。教員も学生も結構忙しい。学生はつぎつぎと卒業していく。研究テーマ設定とその方法論構築の困難性。業績重視・成果主義が横溢する大学世界の問題。研究計画には「期間」がある。これに対して、地域の側の悩みとしては、地域としてはつねに持続的発展を希求しているのであって、「期間限定」「顔ぶれ変わる」「無責任」では困る。とくに空き店舗活用の場合は、元に戻されると逆にダメージが大きい、といった問題があった。

(2) 解決案の提案

<大学の側>

地域の側に大学との連携への期待は結構大きいように、大学の側にも研究・教育の両面から地域社会との望ましい関係を構築したいとする、熾烈な内発的な要求がある。地域に密着し、そのどろどろとした部分に迫ることによってこそ、最先端の研究と生きた教育ができる。研究者と学生が地域住民と触れあい、ともに問題を考えるなかで、生き生きとしたキャンパスが生まれ、地域とともにある新しい大学像が見えてくる。地域の魅力アップは、大学の魅力アップに直接貢献する。熾烈な大学間競争の中で、地域の魅力こそは大学の存立基盤であり、生命線でもあ

る。そこで「教育の場」として正式に教育システムに組み込む。そのための新しい教育方法の開発が必要。

<地域の側>

一方、商店街は「若もの育て」をミッションと武器に仕立て上げる。若もの育てを軸に人的ネットワークを構築し、新商品の開発も含めて、消費のパイを拡大する「大学活用戦略」を展開する。学生たちを「長期滞在学習研究型観光客」ととらえる視点もあってよい。

<大学の新しい役割>

ニュートラルな存在として「張り合い」と「連携」の望ましい前向きな関係を構築するための触媒としての可能性がある。大学には、「オールド」と「ニュー」の対立など、あらゆるトラブルをまちづくりのエネルギーに変える「触媒」としての新しい社会的な役割があるのではない。

おわりに

関西学院大学総合政策学部が三田キャンパスに開校したのが1995年4月であり、論者はその翌年の4月に赴任した。じつは前任地の長崎総合科学大学における最後のゼミ生であった笹谷敦史氏が三田学園出身であり、1996年3月とともに三田にやってきた(戻ってきた)のである。そして、ほんまちセンター街の方々と最初の出会いの機会を作り、その後も何くれとなくご支援して下さったのが、そのご父君であり当時三田市役所に勤務されていた笹谷平氏であったということ、また、ほんまちセンター街には関西学院大学の卒業生が4名おられて大いに歓迎して下さり、数々のご支援をいただいたこと、「ほんまちラボ」の家主である油谷俊男氏が論者の出身大学の先輩であり、かつごく親しい先輩および同

級生の知人であってすぐに信用して下さったこと、「ほんまちラボ」が意図した方向を一回りも二回りも大きくして、ラボのお向かいに市民交流館「縁」を実現されたご当主の中西康男氏は、ラボ開設当初から取材を重ね暖かい視点で報道して下さった神戸新聞の加藤正文氏のじつは大先輩記者という経歴の持ち主であって、当初からはわれわれの思うところを温かく理解され、ついに自力で「縁」を設立されたことなど、数え上げるときりがないほどさまざまな要素と多くの人々の温かいご支援がすべて良き方向にかみ合って「ほんまちラボ」が生まれ、育ったことを補足しておきたい。

まる10年の記念シンポジウムには、100名近くの方々が集まって下さったが、その中には全国各地から駆けつけてくれた30名をこえるラボの卒業生たちが居て、商店街の方々と久しぶりの会話を交わしている美しい風景があった。商店街の理事で関西学院大学のOBでもある住谷義弘氏は「ほんまちラボがまちに貢献したかどうかといった議論もあるようだが、その評価はこうしてたくさんOB、OGが戻ってきてくれたことでじゅうぶん証明されている。そしてわがほんまち商店街が社会にとって価値ある場だということを物語っていると思う」と締めくくって下さった。「まちづくりの研究」においてもっとも大切なことは、研究者の基本的な姿勢として、冷静な視点と同時に地域への共感と温かいまなざしをもつことであると、改めて認識させていただいた次第である。

第2 まちなか研究室の系譜

(小川知弘⁸⁾)

1. まちなか研究室とは？

大学の研究室や学外実習施設を中心市街地などの「まちなか」に設置する試みは、1997年の関西学院大学総合政策学部「ほんまちラボ」に始まり、全国各地に多種多様な取り組みを生み出すに至った。本論では、このような「大学・短大・高専等における学外(主に中心市街地等のまちなか)に設置された、学生の教育を目的に含む研究・教育施設」を「まちなか研究室」⁹と定義づけた場合の系譜について明らかとしたい。

2. 歴史

高等教育の場において、教育・研究を目的として地域を調査する試みは建築・都市計画や文化人類学などの分野においては比較的古くから試みられていた。そのような背景の上に、教育・研究の場として恒常的にまちなかに研究室を設置した事例としては、先にも述べたように関西学院大学総合政策学部の片寄俊秀教授が1997年6月に兵庫県三田市ほんまち通りセンター街に設置した「ほんまちラボ」を嚆矢としている。同年には、滋賀県立大学環境科学部が、サークル形式によって彦根市中心市街地に「ACT」を開設しており、1997年はまちなか研究室という存在が世に生まれ出た年であったといえる。また、この両者はいずれも郊外部に新たにキャンパス及び学部が設置された新設学部で、地域との交流を模索する中からこの取り組みが生まれたとい

える。

1999年には「ほんまちラボ」の影響を受けて福知山市で京都創成大学が「丹波福知山まちかどラボ」を開設し、高崎経済大学でも「高崎活性剤本舗」が、岐阜経済大学では「マイスター倶楽部」が開設されるなど、各地に「まちなか研究室」の動きが芽生え始めている。その後、年を追うごとに新たな「まちなか研究室」の開設数が増加していくことになる。また、この頃には中心市街地活性化法の制定や各地でのTMOの立ち上げなどもあいまって、中心市街地の商店街において「チャレンジショップ」¹⁰の試みも数多くみられるようになってきている。2001年頃から、私立・公立大学による地域コミュニティとの協働だけでなく、横浜国立大学の「和田町いきいきプロジェクト」や佐賀大学の「ゆーらっと館」などのように、国立大学における動きも本格化することになる。このような国立大学によるプロジェクトは、それまでの私立大学において多くみられた社会科学系・人文科学系からのアプローチだけでなく、建築などの工学的なアプローチを含むものが多く、地域活性化へ向けた「実験」「体験」「活動」だけでなく、「研究」にも重点が置かれているものが多い点も指摘できる。

初期には、地方都市において衰退のみえる中心市街地に設置されるケースが多かった「まちなか研究室」は、その後、団地再生をテーマに掲げている千葉大学「CR3」や、中山間地域における活性化を探ろうとしている関西大学の丹波市佐治地区での取り組みなど、ニュータウンの団地内、中山間地域など様々な地域に活動の場を広げている。このような各種の取り組みは、2008年春現在で、全国で延べ50ヶ所以上¹¹が開設されており、「まち

8 大阪経済大学非常勤講師、博士(工学)

9 「まちなか研究室」以外の呼称として、「まちかど研究室」「まちラボ」「まちなか工房」「サテライト研究室」などが使用されている。

10 「チャレンジショップ」はまちなか研究室と異なり、中心市街地の商業地域において学生が「店舗を開設して商売を行う」、「大学のゼミなどが主導する形ではあるが、研究ではなく商業体験を主眼とする」ものが多く、また、設置に際して行政が補助金を出すケースも多く見られた。

11 既に閉鎖されているものも含む。

なか研究室」という取り組みが既に一般化しつつあることを示しているといえる。

3. 分類

「まちなか研究室」を開設した教育機関を「国立大」「公立大」「私立大・短大」「高専」に分けると、私立大・短大が最も多くなるが、国立大や公立大による設置も多く見られる点特徴的である。また、近年は複数の大学が共同する形のものもみられる。設置の経緯をみると、大学側が主体となって設置するケースと商店街や行政などが誘致するケースに大別できるが、近年は大学と自治体等が地域に関する様々な協定を結ぶ中で、その一環としてまちなか研究室を開設する例が目立つようになっている。

運営方法としてはゼミ・研究室単位で活動をしている例が多いが、サークルレベルでの活動も多く見られる。近年では学部レベルや全学レベルで活動を行っている事例も現れており、大学全体として「まちなか研究室」をアイデンティティの一つとして捉える事例も見受けられる。

ゼミ・研究室単位での活動を中心としていた事例としては「ほんまちラボ」の他に、芝浦工業大学志村研究室が東京月島などに設置した「まちなか研究室」などがある。また、サークル形式で運営を行っている事例には先述の「ACT」や「高崎活性化剤本舗」などがあげられる。現在最も多い運営方法は、全学又は学部単位で運営を行なうものである。このタイプには複数のゼミ・研究室が共同で研究・運営を行うタイプと、学生や教員の希望者などを集めてプロジェクトチームを組むタイプに分けることができる。次に、目的別にみると、多くの「まちなか研究室」は中心市街地の活性化を設置目的に掲げている。しかし、その他にも中山間

地域における活性化や団地再生、産業面での産官学連携をも視野に入れたものなどもみられる。

活動内容でみると、地域と共同でイベントを行う、ワークショップを開催する、空き店舗への支援、マスタープラン作成の支援、などがみられる。

4. ほんまちラボの特質

「ほんまちラボ」の「まちなか研究室」としての特質は多く挙げられるが、特に大きな点として、開設段階において地域活性化等に関する目標を設定しないで、教育に徹した点が挙げられる。一般的に、「まちなか研究室」には地域側から地域の活性化の起爆剤として期待されることが多く、「まちなか研究室」の側も成果を期待されていることを理解して、成果を得ようと最初から動いている。しかしながら、「ほんまちラボ」においては地元との交流等から生まれた成果は数多く存在している¹²が、それらの成果を挙げるために「ほんまちラボ」が設置されたのではないという点において、大きな特徴を持っているといえる。

また、地域に入っていくことを主眼としていたため、特に「ほんまちラボ」が置かれたほんまち通りセンター街の商店主・居住者らと学生の間で密接なコミュニケーションが保たれた点も特徴としてあげることができる。

5. 影響

文部科学省による大学教育プログラムである現代GPにおいて、まちなか研究室の設置をプログラムのメインに据えた大学が採択される事例が数多く見られるようになる¹³。まちなか研究室に関する論文としては、「ほんまちラボ」や山口大学¹⁴

12 代表的な成果には、『ほんまち未来塾Ⅱ』から生まれた街路灯や、『ほんまち旬の市』などが挙げられる。

13 現代GPにおいてまちなか研究室の活動を行っている代表的な事例としては、奈良女子大学、法政大学、関西大学、滋賀県立大学、大阪人間科学大学、有明工業高専などが挙げられる。

14 参考文献3)

などの事例において、それぞれ事例報告が行われている。また、これに関連して2006年には日本建築学会大会(関東)において都市計画部門の研究協議会として「期待されるまちづくり連携プラットフォーム～まちづくり実践教育の成果と展望」が開催され¹⁵、主に建築・都市計画系の分野からのアプローチによる「まちなか研究室」の成果と課題についての研究報告と討論が行われ、同時に研究協議会資料として多くのまちなか研究室が事例報告を行っている。このように、学術・研究分野においても「まちなか研究室」は注目を集めるようになってきている。

その他の影響としては、「まちなか研究室」同士の交流を図ることを目的に含めた「全国まちづくりカレッジ」が2002年から各地のまちなか研究室の持ち回り主催という形で開催されている。

6. まちなか研究室の課題

まちなか研究室が各地に設置されるようになって、まだ10年を経っていない。具体的な成果の上がっているものもあれば、既に閉鎖されたものも存在しているが、今後も各地で様々な取り組みが行われていくと考えられる。そのような中で、まちなか研究室の課題も様々に浮かび上がってきている。

まちなか研究室が大学の教育・研究上の組織である限りにおいては、活動に関わる学生が数年単位で入れ替わっていくという特質からは逃れることはできない。このような特質は、活動を継続させていく上では大きな課題として認識する必要性があるといえる。

また、現代GPのように文部科学省の補助金を受けた場合や、行政による中心市街地活性化関連予算による補助金を受けてまちなか研究室を設置す

る場合には、補助事業が終了した際に継続が困難となるケースも見られており、今後のまちなか研究室の運営における課題として指摘することができる。

<参考文献>

- 1) ほんまちラボ研究ジャーナルNo.18(2004.12)
- 2) 2006年度日本建築学会大会(関東)都市計画部門研究協議会資料「期待されるまちづくり連携プラットフォーム～まちづくり実践教育の成果と展望」(2006.9)
- 3) 鶴心治・中園真人・小林剛士「地方大学のまちなか研究室によるまちづくり活動と運営に関する一考察」日本建築学会技術報告集第23号(2006.6)

第3 卒業生が振り返るほんまちラボ (若狭健作¹⁶)

毎週ゼミの時間になると商店街へ集まる。この一風変わった大学生活を送った卒業生が、改めてまちなか研究室を見つめ直した。シンポジウム開催にむけて、ほんまちラボ卒業生を対象に二つの質問アンケートを実施。社会人となった彼らにその役割や意義を問いかけた。返信のあった14人の答えを以下に紹介する。得られた回答はごく一部の当時熱心だった学生やまちづくり関連の仕事に携わっている卒業生が中心であるため、内容にはかなりの偏りがあることを付記しておく。

●質問その1 ラボの経験は今の自分にどう活かしているか？

・相手に対して「温度のある対応」ができてい

15 参考文献2)

16 株式会社環境計画研究所員

- かを考えるようになった。(01年卒・女)
- ・ いろんな人に話を聞いたり、一緒にイベントしたりと人と人とのつながりということがポイントだった。人と一緒に何かをすることがそれまでなかったため、思ったことはきちんと声に出して主張するというのを学びました。(05年卒・女)
 - ・ ラボは現場最前線の情報収集拠点です。飲み会のあることを隠れ蓑に、しらずしらずのうちに、最前線に放り込まれている。商店街のおっちゃんと語っているうちに、自然とまちの問題を認識し、彼らのニーズに沿った解決方法を考える脳みそができあがっている。おっちゃんが言う意見は、時に暴言もあるでしょう。時代感覚がずれてるときもある。仕事をしながら「自分の商売のことしか考えてないな、このおっちゃんは」と思うことはしばしばです。けれども、それをぐっと抑えてかみくだき、世間的に正しいと思われる方向にコーディネーションする思考訓練の場として、ラボは機能していたように思います。(04年修了・男)
 - ・ 「移住者」の地域(商店街)との距離の作り方、学生の生かし方、大学としての関わり方など、まさに実験的な取り組みは沖縄で大学の研究員やNPO支援機関のスタッフとしてベースになっていると思います。(03年修了・男)
 - ・ 今の活動(NPOを主宰)を進めるにあたって、ラボは成功失敗どちらも含めて参考になっています。(04年修了・女)
 - ・ 卒業後、まちづくりに関する仕事に関わることができました。また、所属当時の知り合いから新たな知り合いへと人脈の幅は広がりました。(03年卒・男)
 - ・ 現場を生で感じ取り、重んじることが大切。(99年卒・男)
 - ・ 学生時代何をやっていたの?という質問に対して、ラボの経験はとってもキャッチーなので、興味を持ってもらいやすくなる、気がします。ネタになる、という感じです。また、今思い返してみると、見過ごしてしまうような些細なことを違う角度から見ることで面白く仕立てあげてしまう、という多角的な視点が養われたような、気がします。(02年卒・女)
 - ・ 商店街のように一見薄汚くて暗そうな世界でも、フタを開いて内実を知ると人間同士の温かく深い関わり合い、誰にも負けない専門性や匠の技、規模の割には高収益体質など、とても充実した世界があることを体感できたことが一番の糧です。(06年卒・男)
 - ・ 実践主義。考えながら動く。取り敢えず動かないことには始まらないという行動パターンが身についた。(99年卒・01年修了・男性)
 - ・ ラボでの経験を通して叩き込まれた現場主義のアプローチは、全く畑の違う世界(システム構築)で働いていても、活かされていると感じます。(99年卒・01年修了・男)
 - ・ 社会人になったときに特に発揮されました。人とのコミュニケーションや仕事への関わり方(自ら率先して動く)(04年卒・女)
 - ・ 理屈じゃなくて、現場でしかわからないことがあることを、仕事するうえでも心掛けられているのは、ラボでの経験があるからかなあ、と思います。(01年卒・男)
 - ・ 年上の方との接し方。尊重しつつ、かといって過剰に卑屈にならず、というものを学ぶことができたと思う。(01年卒・03年修了・男)
- (回答の分析)
- 多くの卒業生が商店街や街の人々とのふれあいに強い愛着を抱いているのは、ある種の郷愁なのだろう。回答には懐古的なものも多いが、「異世代との交流」や「街の人とのコミュニケーション

ン]を貴重な経験として振り返る卒業生は多い。また学生が個別で自主的にプロジェクトを運営していくスタイルは、仕事へのトレーニングとして機能していたのかもしれない。「現場主義」「実践主義」といった考え方は多くの学生に浸透しているようだ。

●質問その2 ラボでやり残したことは？

- ・ できれば、本町の人ともっと仲良くなりたかったですね。(05年卒・女)
- ・ 商売している方と話し、一緒に何かに取り組むという貴重な機会があったのに、という後悔がある。(01年卒・男)
- ・ 残念ながらその場にあまり顔をだせなかったことが心残りです。(04年修了・男)
- ・ 実際に他の地域を見に行く機会が、もう少し欲しかったです。(03年卒・男)
- ・ 今振り返ると、もっと長い時間関わっていたかったです。(99年卒・男)
- ・ 勉強。自主的にすればよかったのですが、もっと法律的なこととか勉強しておけばよかったなあと思います。(02年卒・女)
- ・ 色々な活動に手を出しすぎて結局どれも中途半端で自分にも地域にもあまり財産が残せなかったかなと思っています。(06年卒・男)
- ・ 街の活性化。そもそも活性化って何だろうか考えてしまうが…ただ、にぎわう近所の商店街を見ると人が多いほうが良いと思っています。どういうことがしたい、できるのかをもっと突き詰めて話しておきたかったと思っています。(99年卒・01年修了・男)
- ・ 商店街の活性化への貢献。当時はどうしたら活性化に貢献できるかって真面目に考えていました。(99年卒・01年修了・男)
- ・ まじめな勉強(多分やらなくてもいい)(04年卒・女)

(回答の分析)

ゼミ活動の場か、地域活性化の拠点なのか。この問いに対して「ほんまちラボ」は明確な役割を提示しないまま10年が過ぎた。「まちの片隅でそつと定点観測をさせていただく」「あんまりご迷惑をかけることはするな」と教授が学生の活動を静かに見守るスタイルが、全国的にもまれであることは先の服部准教授の指摘にもある。

卒業生からの回答を見ると地域活性化への想いは、1期生を中心とした創設期の学生に強く見られる。「大学研究室が地域活性化」という非常に分かりやすく、社会性のあるメッセージが多く報道されたことも影響しているのだろう。街の人と濃い人間関係ができたこともあり、中には10年を経て「自分たちは商店街のために何ができたのか」と自省の念に駆られる1期生もいるほどである。

こうした創設期の学生に比べて、3～4年目以降では自らのテーマを見つけて学校や地域活動といった商店街以外の主体との協同活動が活発化してくる。これらの多くでプロジェクトチームが編成され、対外的な交渉などを学生たちが自主的にこなってきた。とはいえ毎年15人ほど集まるゼミ生の中でも温度差はあり、参加の度合いにかなりのばらつきはある。